

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730444

研究課題名(和文)「近代の毒/優しい自然」の言説と代替療法 受容促進要因としての「規範」の分析

研究課題名(英文) Discourses of the Poisonous Modern and the Gentle Nature and Alternative Medicine: A research about the "code" and contexts promoting receptive attitudes to alternative medicine

研究代表者

平野 直子 (Hirano, Naoko)

早稲田大学・総合研究機構・招聘研究員

研究者番号：10608433

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、人々が代替療法を受け入れる際の社会的な条件を探るものである。代替療法は科学的な効果が認められているとは限らず、医療や科学の専門家から批判を受けることも多いが、多くの人によって利用されている。医師や専門家による批判をよそに代替療法が支持される背景には、科学的・近代的なものを有害とみなし、「自然」なものをよいと考える考え方の形式(言説)があること、またそれが多くの人に受け入れられていることが推測される。本研究では社会学的な視点と方法により、こうした言説が代替療法の実践とどのようにつながり、またそれが他の消費行動とどのようにつながっているかを明らかにする。

研究成果の概要(英文)：This research explored the social conditions promoting the use of alternative medicine in 2010s Japan. The efficacy of most alternative medicine are not scientifically verified. Medical professionals and scientists are often criticized them. However, they are accepted and used by many people in contemporary Japan. It is assumed that such receptive situation to the use of alternative medicine has some social background. Especially, it is important to focus on the widely shared discourses that modern and scientific things are poisonous and "natural" things is gentle for mankind. This research examined the relation of those discourses and the use of alternative medicine and other consumption behaviors by the sociological perspective and manner.

研究分野：宗教社会学

キーワード：代替療法 代替医療 宗教 ライフスタイル 消費文化 スピリチュアリティ 健康

1. 研究開始当初の背景

本研究当初の問題意識は、「科学的知識の啓蒙の不足」という点から論じられがちな代替療法実践について、社会的な視点によって分析と説明を行う必要があるということであった。2010年に日本学術会議が発した、医療現場でのホメオパシー（「レメディ」と呼ばれる、水に物質の性質を移したという液体を服用する療法）利用を戒める会長声明や、ジャーナリズムにおける代替療法利用についての問題提起は、①科学的根拠のない療法が勧められること、②それを利用することで通常医療へのアクセス忌避が起こること、の2点を問題視していた。こうした注意喚起が、権威ある科学・医療の専門家からなされているにもかかわらず、代替療法は社会のなかで、あるところでは深く強く、あるところでは薄く広く、受け入れられているのが実態である。このことは専門家側からは、科学的知識の啓蒙不足であるとしばしば嘆かれる。

しかし本研究の代表者は、これまでの宗教社会学や文化史研究の研究蓄積を参照し、かつ代替療法に関するメディア報道の分析を行うことによって、代替療法が受け入れられる背景には、それを「よいもの」と意味づけることを可能にする、広く普及した言説の影響があるのではないかという着想に至った。それは「近代的=科学的な知=非人間的・有害=悪/非近代的=自然=人間的・体に優しい=善」という一種の規範的言説である。

2. 研究の目的

上記の問題意識より、本研究課題は、通常医療忌避を代表とする代替療法をめぐる問題のより適切な理解と解決のために、代替療法を「よいもの」と位置づける規範的言説の存在を明示し、それを再生産する社会的プロセスを明らかにすることを目的とする。具体的な方法としては、現代日本で代替療法を実践する人々の意味世界に、質的（インタビュー調査）・量的（調査票調査）両面からアプローチする。その中で、代替療法に関するメディア報道などに広く見られる「近代の毒/優しい自然」の二項対立の言説が、個々の代替療法実践に、あるいは代替療法実践者のライフスタイル選択の傾向性に、どのような関連を持っているのかを明らかにする。代替療法が人々にいかにして「よきもの」として意味づけられるのかを知ることにより、それらが起こす問題に対し、従来の「科学による啓蒙」とは違う観点による対応を考えていくことができると思う。

3. 研究の方法

本研究は、(1)代替療法実践者へのインタビュー、および(2)インターネットを用いた代替療法実践に関する実態調査、の2点を中心に行われた。また調査対象によっては、(3)代替療法のセミナーやイベントにおける参与観察・資料収集からも大きな収穫を得た。

一方、同時並行で進められた科学研究費基盤研究(C)「近現代日本の民間船診両方に関する宗教史的考察 身体と社会の観点から」(課題番号24520075、研究代表者・吉永進一)から得た示唆により、調査対象についての(4)大正期～昭和戦前期を中心とした歴史的資料の収集を行った。以下にそれぞれの詳細を示す。

(1) インタビュー調査

代替療法のうち、「レイキ」(身体に手を当てて「エネルギー」を流すことで、心身の調子を整える療法)について、実践者14名(うち指導者層3名)に対し、2012年9月から2013年9月にかけて、半構造化インタビューを行った。またこの間、ホメオパシー指導者1名に対してもインフォーマルな形式で聞き取り調査を行った。当初の計画では、ホメオパシーおよび「マクロビオティック」(易を独自に解釈した意味体系に食物をあてはめる食事法)15名程度の対象者を得てインタビュー調査を行う予定であったが、実践のされ方や実践団体の性質などを鑑み、これらの療法の調査には資料の収集や参与観察の方が適当と判断した。その結果、インタビュー対象者は最終的に15名となった。

(2) インターネットによる実態調査

2016年2月24日～26日の期間に、株式会社マクロミルのアンケートモニターに対するインターネット調査を実施した。20歳以上の男女1,000人を対象とし、20代から60代以上の5つの年齢階層をさらに男女に分け、それぞれのクラスに100人ずつのモニターを割り当てて回答を募集。既定の数の回答が集まり次第締め切るという形を取った。調査項目は個人属性のほか、代替療法や健康に関する身体実践の経験と頻度、情報収集の方法、消費傾向(とくに倫理的消費への態度)、健康状態、メディア利用の傾向、生活満足度、社会制度への信頼度、一般的信頼などの価値観である。

(3) 参与観察・資料収集

研究期間開始前から行っている、代替療法が扱われるイベントやセミナーへの参与観察を、期間中はとくに(1)に挙げた3療法について集中的に行った。レイキとホメオパシーについては、調査目的を明かしたうえで、実際の施術を受けたり、研究会への参加を行ったりした。

またその過程で、出版物、配布印刷物、画像など多くの資料を収集した。

(4) 歴史的資料の収集

レイキとマクロビオティックは大正期から昭和戦前期の日本で生まれた(その後一度海外で流行したものが、20世紀末に日本に逆輸入され、現代日本での実践につながる)ものである。前述の基盤研究(C)での共同研

究により、この時代の代替療法の世界についてさらに多くの資料や情報が集まり、これらを生んだ社会背景や、心身に関する知識のグローバルな流通について考察することが可能になった。これらによって得られる知見を、現代の代替療法の背景とつなげる・あるいは比較することは、近代化以降の日本における代替療法「界」の成り立ちを理解する上で非常に重要である。そこで基盤研究(C)代表者・吉永進一らの協力を得て、研究期間開始後から歴史的資料の収集や海外研究者とのネットワークキングも行った。

4. 研究成果

本研究課題の成果は、研究開始当初の予想を超えて非常に多岐にわたった。以下、(1)~(4)3に挙げたそれぞれの研究方法から得られた知見と、(5)その他の成果にわけて記述する。

(1)個人が代替療法にアクセスするプロセスについて

方法(1)におけるレイキ実践者へのインタビュー調査により、実践者個々にレイキへどのようにアクセスしていったかを聞き取ったところ、ほぼすべての調査対象者が、自身の生活上の困難——一種の「剥奪」の体験——を上げた。またその際に、レイキという実践を選ぶことになったきっかけとしては、メディアよりも知り合いからの口コミを挙げる例が多かった。

メディアへの接触を挙げた例であっても、「自身の健康問題をきっかけに、書店で代替療法に関する本を手にとった」というものである。当初はメディアで、ライフスタイル関係のメディアにおける「優しい自然」の言説が薄く広く共有されていることが、代替療法アクセスへの抵抗感を低下させているという予想を立てていたが、これに反して、もともとライフスタイル誌などのメディアに親しんでいたという回答は1件しかなく、メディアからの影響についてはほとんどの回答者が否定的であった。

言い換えると、実践者個人から聞きとられた、代替療法実践のアクセスへ向かう「物語」の基本形式は、生活のなかで生じた困難(ただし、必ずしも身体的なものばかりとは限らない)から、「別のやり方・あり方」=「オルタナティブ」を見出ししていくというものであった。そこで問題は、そのときにアクセス可能であったオルタナティブな治療法・健康法やライフスタイルがいかなるものであったかということになる。

(2)代替療法実践とその他の消費実践との関係について

一方、インターネットのアンケートモニターを対象とした、代替療法実践の実態に関する量的調査からは、(1)とは異なる実践者の側面を見ることができた。調査においては、

13の代替療法カテゴリ(鍼灸・マッサージ・柔道整復・整体・カイロプラクティック・ヒーリングサロンでの施術・健康器具・漢方薬など)へのアクセス経験・頻度について聞いており、この回答を得点化した。その上で、代替療法アクセス得点の高い上位10%がどのような特徴を持っているかを分析したところ、以下のような結果が得られた。

①心身についての悩みを抱えている割合が高い。

予想される通り、アクセス得点と非常に関連が深いのは、「(自分が)健康問題を抱えていること」である。ただしこの層の特徴はこれだけではなく、下のように行動・意識レベルでも興味深い傾向を持っている。

②「オルタナティブな消費」を行う傾向も強い。

代替療法アクセスが多い層では、買い物をするときに気をつけることとして、「国産を選ぶ」「地元近くの生産物を選ぶ」「放射性物質がなるべく含まれていないものを選ぶ」などについて、肯定的。回答が多い傾向がみられた。これは食品の消費傾向として見れば、「健康志向」とも言える傾向である。

ただしこの層では、買い物の際に「フェアトレードのものを選ぶ」「環境に配慮したものを選ぶ」「伝統的な製法のものを選ぶ」といった、倫理的消費などのオルタナティブな消費スタイルを聞く質問でも肯定的回答の割合が多い。代替的な治療や健康法などの利用が高いことが、その他のオルタナティブなライフスタイル消費の傾向と連動していることが見て取れる。

③新しいものへの積極的な態度

代替療法へのアクセスが多い層では、新しいものに対して積極的な態度を聞く質問文(「初めて見る物事でも、興味があればどんどん試してみるほうだ」)についても、肯定的回答の割合が高い。

以上のことから、代替療法へのアクセスが多い層は、健康への関心だけでなく、全体に未知のことへの抵抗感が低く、多様な考え方に興味を示し、消費を行う傾向にあることがわかった。

(3)ライフスタイル消費関係メディアやイベントなどが果たす役割について

研究期間開始前の研究より、「近代の毒/優しい自然」という言説は、オルタナティブなライフスタイルを提案するメディアやイベントなどに典型的に見られるものであることがわかっている。これらは代替療法を常に好意的に扱っており、本研究で中心としている3療法もその中にしばしば見られる。そのため、研究開始前には、個人が代替療法へとアクセスするきっかけとして、事前にこうしたメディアやイベントに親しんでいたことが挙げられるのではないかと予想していた。しかし(1)からは、そうした結果は得られなかった。

一方で、3療法が登場するイベントでの参与観察や、資料の収集からは、2010年代においても代替療法がオルタナティブなライフスタイルを構成する重要なアイテムとして紹介されているのを確認することができた。そうしたイベントやメディアが、個別の療法を超えて全体を通じたテーマとして掲げるのも、依然として「近代の毒／優しい自然」という言説であった。

代替療法実践者のなかには、こうしたイベントやメディアに触れ、さまざまな療法に広く深く接する層と、ロコミや個人的なネットワークによって個別の療法に接触し、実践している層の2極がある可能性がある。たとえば実践者中の指導者層では、多くの代替療法を経験していることが多く、また調査時点でもレイキとアロマセラピーやリフレクソロジー、パワーストーンを用いたヒーリングなどを併用している例が複数あった。

総合してみると、オルタナティブなライフスタイルに関するイベントやメディアは、さまざまな実践を集め、意味づけ、並列させてアクセスしやすくするプラットフォームとして機能しているようだ。(3)の調査で、代替療法アクセスの多い人は、さまざまな事柄に興味を持ち、積極的に消費・実行していく傾向があることが示されているが、そうした人々がイベントやメディアなどの中心的な消費者か、またはサービス提供者の層をなしているのではないか。彼らが指導的に活動する代替療法実践に、生活上の悩み（特に心身の）を持つ人々が、ロコミやフェイスブックのネットワークを通してアクセスしていくというのが、代替療法実践の構図なのではないかと推測される。

(4) 歴史研究から：20世紀初頭の代替療法「ブーム」との比較

前述の基盤研究(C)における歴史資料の分析からは、「精神療法」——日本の近代的医療制度完成期に現れた、呼吸法や瞑想により精神を「操作」することで病気を治すという一群の療法——を事例として、1920年代前後に代替療法の「界」が立ち上がっていくさまを見ることができた。なお、レイキは「精神療法」の一種、臼井甕男が考案した「霊気療法」がもとになって生まれたものである。また、マクロビオティックの直接の祖である桜沢如一も、これらの療法家と近い位置で活動していた。

「精神療法」やその周辺の療法に見られる体験談、または療法家自身のプロフィールなどを見ていくと、それらが当時新しく生まれた都市市民階層の悩みと欲求にこたえるものであったことがわかる。当時の医療では解決できない身体の悩みの解決はもちろんのこと、「悪癖」（依存症や過敏な性格など）の矯正や受験や仕事における成功などをうたうさまざまな療法が、現在でいう通信教育やセミナーの形で実践者を集めていた。

そこに見られるのは、都市生活のなかで苦悩しながらも、高度なリテラシーを發揮して、「現代科学」さえ超えると主張する新奇な療法に野心的に取り組んでいく、進取の気性に富んだ消費者たちの姿である。これは現在の代替療法実践者の姿と共鳴しあう部分を多く持っている。また上に挙げたレイキやマクロビオティックの例でわかるように、1920年代の代替療法に見られた実践や言説のなかには、「近代／自然」や「身体／精神」の二分法など、現在も通用しているものが多くある。この層の厚さが、それ自体代替療法の信用性を高めるものとなっていることにも、注意が必要である。

(5) その他：研究者間のネットワーキング

本研究課題、特に上記(4)を進めていく上では、歴史研究、特に宗教史研究との共同作業が不可欠であり、これによって代替療法をより広い視野から考察することが可能になった。また、代替療法は宗教と科学（医学）の両方から概念や考え方が窃用され、自由に組み合わせられていることが多い。そのため、科学史・科学文化論などの研究者からもさまざまな示唆を与えられた。本研究で作られたこのようなネットワークは、今後も代替療法研究に生産的な切り口をもたらすものになるだろう。

また、主に扱った3療法は、身体技法や心身観のクロスカルチャルな流通を背景とした、戦前期から続くグローバルな歴史を持っている。そのため、研究を進める中で海外研究者とも協力体制が築かれ、2015年には国際宗教史学会エアフルト大会において、日米の研究者からなるパネル報告という形で成果を発表することができた。またその内容を英語論文にまとめ、発信することができたことは、引き続き代替療法や心身技法のグローバルな展開を研究していく上での足掛かりとなっていくだろう。

<引用文献>

①日本学術会議、「ホメオパシー」に関する会長談話、2010年
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-d8.pdf>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

①HIRANO, Naoko, “The Birth of Reiki and Psycho-spiritual therapy in the 1920s-1930s Japan: The influence of “American metaphysical religion”, *Japanese Religions* no. 40, 2016, 65-83.査読有

②平野直子、「スピリチュアル」の系譜を描き直す—ヒーリング技法「レイキ」の誕生から現代自己啓発言説まで—、

応用社会学研究、査読無、58、2016、81-92

- ③平野直子、「オルタナティブな食」と身体、宗教研究、査読無、第90巻第2輯、2016、(予定)

〔学会発表〕(計7件)

- ①平野直子、代替療法における「近代的事であること」の問題化とその背景—手当療法「レイキ」を事例として—、「宗教と社会」学会第20回学術大会、長崎国際大学、2012年6月16日
- ②HIRANO, Naoko, “The Global and the Local in REIKI: Countermodern Discourse in ‘Reijitsu,’ New Age and the “Supirichuaru”, Session 20: The Global and the Local in the “Supirichuaru” (Spiritual) of 21st Century Japan, The Sixteenth Asian Studies Conference Japan, 立教大学, 2012.06.29.
- ③平野直子、宗教・医療・精神療法—昭和戦前期における差異化の言説と困難—、パネル「近現代日本の民間精神療法の展開」、日本宗教学会第72回学術大会、國學院大學、2013年9月8日
- ④平野直子、拡散・遍在化する宗教—大衆文化の中のスピリチュアル—、分組「現代日本における宗教と社会の最前線—東アジアとの対話を通じて②—」、香港亞洲研究學會第九屆研討會、香港大学、2014年3月17日
- ⑤平野直子、1920年代～30年代の代替療法ブーム—スピリチュアリティ研究の方法を再考する—(テーマ・セッション「21世紀のスピリチュアリティ研究」)「宗教と社会」学会第22回学術大会、天理大学、2014年6月22日
- ⑥ HIRANO, Naoko, “American Metaphysical Religion in *Seishin Ryōhō* and Reiki Ryōhō in 1929s-1930s Japan”, XXIst World Congress of the International Association for the History of Religions, University of Erfurt, 2015.08.25.
- ⑦平野直子、1920～30年代「精神療法」と「メタフィジカル宗教」、日本宗教学会日本宗教学会第74回学術大会、創価大学、2015年9月5日

〔図書〕(計3件)

※いずれも分担執筆

- ①平野直子、拡散・遍在化する宗教—大衆文化のなかの「スピリチュアル」—、高橋典史・塚田穂高・岡本亮輔編著、宗教と社会のフロンティア—宗教社会学からみる現代日本—、勁草書房、91-108、2012年8月

- ②平野直子、霊気療法とレイキの長い旅、岐阜県立博物館編、特別展「奇なるものへの挑戦 明治大正／異端の科学」(展覧会図録)、岐阜県立博物館友の会、27

- ③平野直子「大正期の臼井霊気療法—その起源と他の精神療法との関係—」、栗田英彦・塚田穂高・平野直子・吉永進一編、近代化された<気>—精神療法の「気」「坐」「道」—(仮題)、せりか書房、(予定)

〔産業財産権〕

- 出願状況 (計0件)
○取得状況 (計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平野直子 (HIRANO, Naoko)
早稲田大学総合研究機構招聘研究員
研究者番号：10608433

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし